

本学創設者、秋山卓爾先生とご令室エツ様の追想 —秋山家のアルバム、ご家族様からの手紙と資料より—

春沢信哉

The Reminiscence of Our School Founder, Professor Takuji Akiyama and His Wife Etsu — From Photo Album, Notes, and Letters from Akiyama Family —

Shinya HARUSAWA

*Emeritus Professor, Osaka University of Pharmaceutical Sciences,
4-20-1, Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan
(Received October 16, 2020 ; Accepted December 1, 2020)*

Abstract Professor Takuji Akiyama established Teikoku Women's College of Pharmacy with the support of his wife Etsu in 1925, after making every effort to establish the school. The school is the first women's college of pharmacy in Japan and the origin of Osaka University of Pharmaceutical Sciences. The author would like to look back on their strenuous efforts from Akiyama family's photo album, notes and letters of their grandchildren.

1. はじめに

私は、平成31年3月に『日本初の女子薬専設立者、秋山卓爾先生-ご家族と私の出会い』と題する最終講義を行いました。この度、紀要編集委員会から最終号となる大阪薬科大学紀要に、この内容をぜひ寄稿して欲しいという強い要望がありました。この講義は、『わが大学史の一場面、日本の近代化と大学の歴史』という『大学時報』のシリーズ記事に同じ題名で執筆したものを基に行ったものでした（文末の文献③）。

平成17年7月に、秋山卓爾先生のご家族様を本学にお招きする行事がありました（この行事の経緯は、文献②～④に詳しく書いています）。その当日、ご家族様は貴重な写真や資料をお持ち下さいました。私はその行事の担当者であったため、それらの資料と後に頂いたご家族様からの御手紙、メール等が私の手元に残りました。今回、それらを詳しく調べる中で秋山先生のご家族の様子、とりわけ大学の正史『大阪薬科大学八十年史』（文献①）には全く出てこない奥様のお人柄と大学設立

のための御尽力を知ることが出来ました。本稿では、先の大学時報の記事（文献③）で触れなかった内容をもって秋山先生ご夫妻を追想できるものとしたいと思います。

2. 秋山卓爾先生の御業績

最初に、秋山卓爾先生の業績を簡単に述べると、先生は、明治37年初代校主平山松治先生と共に大阪道修薬学校を設立されました。その後経営難で廃校に直面した大正10年、敢然と平山校主の後を受け継ぎ校主となり、未曾有の困難に対処し、ついに大正14年日本初の女子薬専である「帝国女子薬学専門学校」の設立を果たされました。秋山先生は、債務関係書類すべてに署名し、運営資金を自ら提供し、昭和14年2月10日に66歳で亡くなるまで、35年の永きに亘って献身的尽力により今日の大阪薬科大学の基礎を築き上げられました。それは、まさにこの学校を設立した人達と共に人柱にも等しい幾多の困難を乗り越えた努力が積み重ねられたものでありました。しかし、このような

前人未踏の不滅の功績も戦後の混乱の中でいつしか人々の記憶から薄れ、またご家族様の消息も不明となっていました。しかし、幸い森下利明先生（本学名誉教授）は、本学の歴史資料を丹念に検証確認され、本学初の正史『大阪薬科大学八十年史』（文献①；以下「八十年史」と略）の中で秋山先生の功績を私たちに伝えられました。その「八十年史」には「秋山卓爾氏は、（中略）今日の薬大の基礎を築き上げたのであって、その功たるや計り知れないものがある。本学八十年の歴史の中に残る功労者のうち、最初の一、二に指を屈しなければならぬ人がこの秋山氏であるという点において、異論をさしはさむ人はないであろう」と書かれています（文献①、64頁）。

3. 秋山先生ご夫妻の貴重な記念写真

私が、秋山卓爾先生について初めて知ったのは、平成7年3月、森下利明先生の最終講義の時でした。先生が大学の「八十年史」を苦労の末編纂された話の中で「本学の幾人かの功労者の中で誰が第一の功労者であるかと言われれば、それは秋山さんであり、秋山さんにいたってはどのくらい私財を使われたのかわからない」という話を聞きました。それから時はながれ、平成16年10月9日には本学創立百周年記念式典が挙行されました。しかし、秋山先生のご家族様の消息は依然不明ということで、私と同僚の先生方はご家族様をご招待できなかった事を残念に思っていました。その式典のほぼ1月後の11月7日（日）に、全く偶然なことに、私の妻のテニス仲間の高槻市在住の小野允久（みつひさ）様が秋山先生のお孫様であることを知りました。私の問い合わせに対する小野様の返信メールには、「祖父の件ですが説明不足で申し訳なかったのですが、実は母方の祖父ですので名前は「秋山卓爾」と申します（2004.11.7. 8:13. PM）」とありました。私は、大変驚いて翌日すぐ資料室整備委員長の坂田勝治先生（本学名誉教授）にお知らせし、それが切っ掛けとなり本学の百周年事業の一貫として秋山先生ご家族様を大学に御招待することとなりました（文献③と④にその経

緯を詳しく記載しています）。その準備のため秋山家からは小野允久様が、本学からは資料室委員会委員であった私が両方の連絡役となりました。小野様が初めて大学の私を訪問された時、戦後の秋山先生のお子様達はとても苦勞されたこと、今はほとんどがお孫さんの世代になっていること、また、空襲で秋山家には資料がほとんど無くなっていると言うことでした。しかし、この時、お孫さんの石田恵子様（京都市伏見区）が所蔵されていた秋山先生と奥様エツ様の写真（写真①）と、秋山先生のご長女英子様（恵子様の母上）の婚礼写真（写真②）、さらに秋山先生が経営されていた大阪の秋山薬局の写真を持参されました。私は、秋山先生の写真は何度か見ていましたが、奥様エツ様のお姿はその時が初めてでした。それは私だけでなく大学関係者の誰も見たことがない穏やかで美しくそれでいて凜とした明治生まれの御夫人のお姿でした（写真①）。私はこのお二人の晴れやかな写真は本学にとってとても貴重な物であると直感し、すぐ坂田先生に報告すると翌日には森下先生によって「大正14年5月9日、守口校舎校門前で日本最初の専門学校昇格と創立20周年を兼ねての祝賀会の記念写真」に間違いのない事がわかりました。この写真①は、今では本学の第一級歴史資料としてよく紹介されています。

ご夫妻のご長女英子様と石田幸次郎様の結婚時の集合写真②は、昭和8年11月25日のもので、新築されたばかりの松原校舎の正面玄関で撮影されたものでした。この写真は、幸いに名前入りであるため秋山家ご親族様を特定できる貴重なものでした。石田幸次郎様は、同窓会名簿から大正10年道修薬学校卒業生で、秋山先生の書生をされて秋山家から学校に通っておられたと聞いています。昭和10年設立の道修薬学校の同窓会「道薬会」の評議員をされたことが、「八十年史」（文献①、446頁）に記載されています。また、この写真以外に秋山先生ご夫妻と公の場で一緒におられることから、秋山先生のお側で何らかの役割を果たしておられたのではないかと考えています。これについて、幸次郎様の長女石田恵子様と二女藤田比佐子様に今回お聞きしたところ、「石田幸次郎は、秋山



写真①：秋山先生と奥様エツ様（大正14年5月9日、守口校舎校門前で日本最初の専門学校昇格と創立20周年を兼ねての祝賀会の記念写真；お孫様の石田恵子様所蔵より）。（*写真左下のKAMIFUKUSHIMAとは：当時の西成郡上福島村と思われます。現在も上福島郵便局、上福島小学校の名が残っています。）



写真②：ご長女英子様と石田幸次郎様の結婚式の集合写真（石田恵子様所蔵）、昭和8年11月25日（写真サインより）；松原校舎の顔であったアーチ状の正面玄関で（この写真では、涼子様が四女、多恵子様が三女となっていますが、それぞれ三女と四女の誤りと石田恵子様からご指摘がありました）。

融（長男）が家を出た後、長女として家を継ぐかたちとなっていた英子（長女）と結婚。「秋山薬局」の薬剤師もしていました（戦前まで）。エツが戦後京都へもどったあとも、昭和30年10月に死亡するまで石田の家で生活していました。」

私の手元には、他にご長男の融様の結婚式の集合写真（昭和13年）がありますが、これも松原校舎の同じ場所で撮影されています。この様に、ご家族は何かの折はいつも学校に集われていました。

4. 秋山先生ご家族様の本学ご訪問

平成17年7月31日、秋山先生の直系のお孫様、秋山寿一様（埼玉県狭山市）をはじめとした11家族15名の方に全国からお越しいただきました。当日は、皆様2時に本学玄関に到着され、まず100周年を記念して出来たばかりの資料室と本学の歴史ビデオを見ていただきました（写真③）。3時から、大会議室で本学関係者30名ほどが参加し記念行事を開催いたしました。最初に本学よりのご挨拶、つづいて直系の秋山寿一様からご挨拶をいただき、そのあと秋山家の方々のご紹介がありました。次いで秋山先生と奥様エツ様の写真①とご長女英子様のご結婚写真②の紹介、続いて小野允久様が作成された家系図（資料①）をスクリーンで披露しました。その後、秋山先生のお話を森下利明

先生からして頂きました。森下先生は、御体調が充分でないにもかかわらず快く私たちのお願いを聞いて下さり、そのお話は秋山先生の御業績だけでなくエツ様の本学に対する並々ならぬご尽力と、秋山先生がやさしく高潔なお人柄のため如何に学生に慕われていたかに及ぶものでした（文献②は、この時の森下先生の講演録です）。

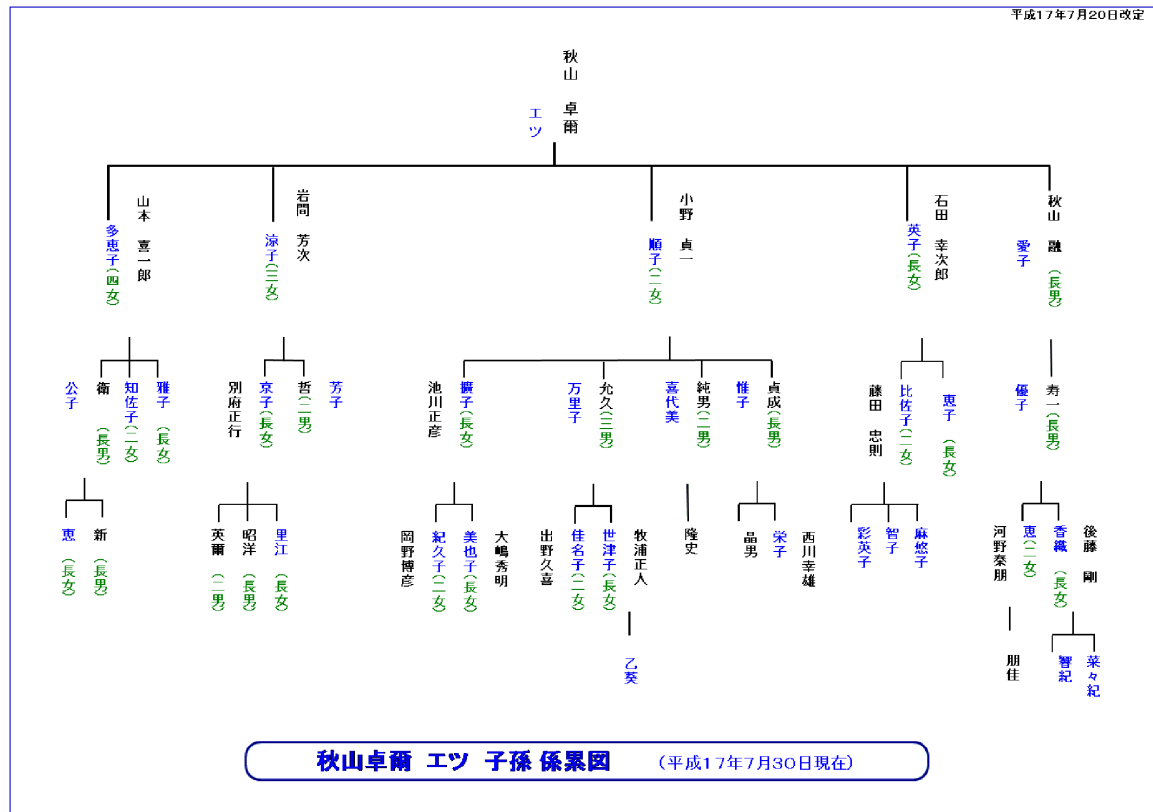
この催しで、ご家族様は秋山卓爾先生に関する所蔵写真といくつかの資料を持参下さいました。私はこの日ご家族様を資料室に案内した後、記念式典での司会を務め多忙であったため、他の資料室委員に所蔵写真の複写を急ぎ頼んだのを覚えています。その後、それらの写真と資料は私がずっと保管してきました。また、ご家族様から礼状をいただき全国に離れ離れになった秋山家の人々がこの機に再び親交を深められているということも知りました。

5. 大川芳裕氏の『秋山先生を偲ぶ』について

ご家族様の資料の中に大川芳裕氏の『秋山先生を偲ぶ』という2頁のコピーが含まれていました。大川氏とはどのような人物なのか？、また、この文章の出典はどこからか？は不明のままでした。今回、同窓会室の事務局で調べていただいたところ、大川氏は秋山先生に指導を受けた道修薬学校



写真③：平成17年7月31日、資料室での秋山先生のお孫様達。



資料①：秋山家御親族様家系図（小野允久様作成）。

の大正10年の卒業生で（先の石田幸次郎様と同級生）、しかも元同窓会長（昭和48～51）をされていた方であることがわかりました。また、その文面は、大阪薬科大学同窓会誌（第4号）の創立70周年記念号（20～21頁）からであることが判明しました。

その中から秋山先生らの御苦勞を抜粋すると「大正10年は母校の70年の歴史の中で最大のピンチに出食わした時である。－(中略)－折も折、そんな時に平山校主は金沢への転任が決まり、大阪を去らねばならなくなったのも一つの原因であるかもしれないが、平山校主は廃校を主張せられた。これに対して秋山卓爾先生は在校生の帰趨を思い継続を主張してこれを譲り受け自分で経営することになった。」そこで、秋山先生は他の先生方と共に在学生や卒業生宅を訪ねて資金調達をされ、また財源獲得のため、予備校の開設や各地で八馬（はちうま）圭一氏の音楽会を催されました。この音楽会については、大川氏は大阪で二回（中央公会堂と朝日会館）、京都で一回（岡崎音楽堂）、和

歌山で一回（公会堂）、音楽会を開いたと記しています。一方、森下先生が作成された年譜（文献②）には大正11年（1922）に寄附金集めに「八馬圭一氏が音楽会を開いて協力」とあり、秋山家にも音楽会の写真④のAとBが残っていました。八馬氏を調べてみると、テノール歌手としてデビュー、ヴァイオリニストとしても活躍し、1960年代は兵庫音楽学校校長、新日本音楽協会会長もされ、音楽の世界で大変名をはせた方でした。八馬氏は（大川氏は、道業中退としていますが）、本学の記録では大正4年9月卒（1915）で、第24回卒業生です（文献①、476頁）。また、本学同窓会室所蔵の大正4年12月の大阪道修薬学校々友会の「會誌」（第七号）には、福井出身（平民）で卒業写真の中にも見つけることが出来ました。

大川氏は、このような秋山先生の努力の結晶として日本最初の女子薬学専門学校が誕生したとしていますが、奥様エツ様に関する記載はわずかに「秋山夫妻の努力がこうにして報いられ――」とあるだけでした。大川氏はこの記事の最後に、



写真④A：大正11年（1922）。秋山先生と八馬氏のサインがあり、前列左より三、四人目に秋山先生ご夫妻、前列右から一、二番目に涼子様と多恵子様、後列右から順子様、英子様、石田幸次郎様が、後列左端に博様（四男）。（場所は、現在の中之島公会堂と思われ、本学には同じ場所の講演会の遠景写真も知られています）。



写真④B：秋山先生ご夫妻と八馬圭一氏（一人の女性是不明）。

これを書こうとした動機として「昨年発行された同窓会名簿の、死亡された先生の中に秋山先生の名前が洩れていることに気がついたときである。」とされています。この大川氏の文面が秋山家にあったということは、創立70周年の昭和50年には、まだ秋山先生のご家族と連絡がついていたことになり、さらに大川氏は10年後の「八十年史」の中の「懇談会の記録」で話をされています。一方、今回の調査で、三女涼子様は、昭和11年の本学卒業生であり、他に御親族のお二人も戦後の本学卒業生であった事がわかりました。しかし、私は「八十年史」に携わった人達からは、ご家族の消息は全くわからなかったと聞いていました。私は、とうに消えかけた本学の命脈をただ一人背負って発展の礎をつくられた恩人への大学側の不誠実と怠慢さを思わずにはいられないのです。

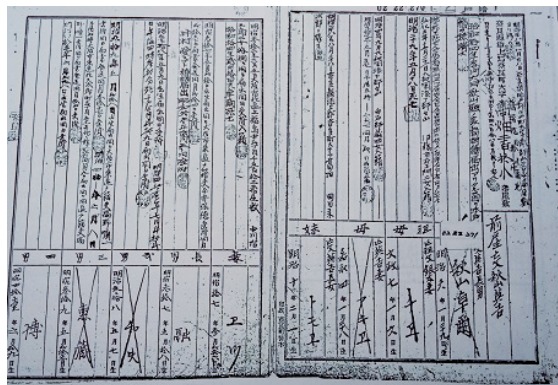
6. 一枚の写真からの新事実

ご家族様の本学ご訪問の際に持参された多数の写真のうちの一枚が写真⑤で、秋山先生ご夫妻とお嬢様4人と成年男子4人の写真であり、いかにも家族写真のようでした。しかし、私は、この写真を見た時、強い違和感を覚えました。それは、秋山先生のお子様は一男四女と聞いていて、小野允久様の家系図（資料①）にもそうになっています。そうであるなら、1名は、ご子息として他の3名の青年は誰なのか？。私は、当惑しましたが、その時、私の秋山先生に関する書類箱の底から驚くべきものを見つけました。それは、秋山先生の戸籍謄本（資料②）で、確かに14年前にご家族様がお持ちになった中に、これがあったのを思い出しました。この謄本には、「昭和拾四年参月六日秋山融ノ家督相續届出アリタルニ因リ本戸籍ヲ抹消ス」という付箋が貼られています。これによりご



写真⑤：大正末頃、守口校舎の校門前の建物での家族写真。

前列右から、順子様（二女）、涼子様（三女）、多恵子様（四女）と秋山先生ご夫妻、後列右から英子様（長女）、博様（四男）、石田幸次郎様、融様（長男）で、左端は書生のお一人（名前不明）です。



資料②：秋山先生の戸籍謄本（3枚の内1枚目）。



写真⑥：下縁に「昭 2.3.14 父母銀婚式記念」と書かれている。

家族様の正確な記述と日付が明らかとなりました。これによると秋山先生ご夫妻のお子様は、五男四女でしたが、そのうち二男と三男の方はそれぞれ3才と2才で早逝され、五男の方も除籍（手書き記載のため判読できず）になっています。今回、写真⑤を石田恵子様に見ていただき正確なお名前などがわかりました。撮影時期は、末子の多恵子

様が、大正5年生まれであること、また昭和2年の別の写真（写真⑥）の下縁に「昭2.3.14父母銀婚式記念」とあり、この二枚を比べると大正末の頃と思われます。また、撮影場所は守口校舎の校門前の建物と特定出来ました。写真⑤をよく見ると4人のお嬢様方は幼いお二人は首から、年長のお二人は左腰上から十字架を下げられていることに気

がつけました。奥様のエツ様が熱心なクリスチャンであり、ご家族様の日常は信仰に基づいたものであった事がよくうかがえます。

7. 奥様エツ様とお子様達

奥様エツ様は、明治17年兵庫県生まれで、明治32年に数え年16才で秋山先生と結婚されています(資料②と写真⑦A)。「八十年史」には奥様については全く触れていませんが、ご家族様からの手紙などから、奥様の本学への御尽力の様子が知ることができるようになりました。大正10～13年にかけては、道修薬学校の男子部を廃して全国にまだ一校もない女子薬学専門学校を目指すという本学経営上最も苦しい時代で、その資金のほとんどを寄附に頼らざるを得ませんでした。この時期の奥様の話が、「八十年史」の懇談会記録にも出てきます。

- ① 道修薬学校卒業生の樽谷種三郎氏と大川芳裕氏(いずれも大正10年卒)の話(「八十年史」懇談会の記録、125頁より)。

(樽谷)：「秋山先生の奥さんが寄附集めに来られた。いっぺんに出さんでいいからと。それでも私も二百円の奉加帳をださせてもらった。私ら店員しておって、月に十五円か二十円の給料しかもろ

うてへん時にね、五十円いっぺんに出したこと覚えてますわ。五百円あったら薬局が開設出来た時分ですからね、つらかったです。」、(大川)：「財団法人にするには、十万円の金がなければいかんかったのです。それで、出身者の寄附名簿が揃ってなければ文部省が許可しないということで、奥さまも卒業生を片っ端から回られたわけです。」

さらに、ご家族様からの私への礼状などの中にもいくつかの貴重な話があります。これらは、ご家族様から大学への大切なメッセージですので、それらを原文のままで抜粋いたしました。

- ② 石田恵子様(長女英子様の一女)の手紙より：

「『八十年史』を偶然入手した私ですが、*1 私がよろこんだほど母はうれしさを出しませんでした。母としては学校を存続するために母エツと共に学校のことににかかわって、多くの兄妹の面倒は長女の母や妹たちが親にかかわって、自分たちも大きく犠牲になっていたようで、今回の訪問でそのことが改めて大きく深いものであったと知り、少々ショックなことでした。八十年史以前には薬大の歴史の中に「秋山卓爾」は存在していなかったと、父の同窓生の方たちから聞かされていたので、複雑な思いです。祖母エツの存在がなければ、



写真⑦：A. 新婚当時(ご夫妻の結婚は、明治32年)；B. 若き日のご夫妻とお子様達。

祖父は存在していなかったとおもわれる。男まさりのエツも二度の空襲や北海道への疎開、内地にもどっても大阪でなく京都に住まいして私の家で一緒に住み、昭和三十年十月十九日、一週間寝込んだだけの大往生で波乱に富んだ人生を終えました。当時の柿沼学長^{*2}から後日弔辞をいただいております。おんなは強いようです。母たちの苦しかった記憶は、おんなの子供へと伝えられているのです。(H17/10/3)」

(※1: 恵子様が龍谷大学の図書館勤務の時に「八十年史」が図書館に届いたというお話を聞いていました。※2: 柿沼三郎学長の在任期間は、昭和二十七年～四十年と記録にあります。)

③ 藤田比佐子様（長女英子様の二女）の手紙より：

「祖母秋山エツは、私が幼稚園の時、我が家でその生涯を終えました。台風の中で行われた葬儀の折には、大学から御花料を届けていただいております。この時には京都の家の所在を知っていただけだと思います。それに私の父、石田幸次郎は、秋山卓爾の書生でもあり同窓会のメンバーでした。その後なぜ祖父の存在が知られなくなってしまったのか――」(H17/9/26)。

④ 池川擴子様（二女順子様の長女）の手紙より：

「母（二女順子）から「秋山のお祖父さん、お祖母さんは、小さい子供達を家の大きな柱にひもでくくって、年上のお姉さんや私が面倒を見ている間に薬学の為に頑張っておられたのよ。」と何度も聞かされておりました。私が結婚してから母から貰った手紙の中に「亡くなった秋山の父が角(ツノ)を出すな。従順の順をつけたのだと、温顔でよく夜中に板チョコの部厚（ぶあつ）いのを食べながら（父は学校の調べ物。私はバレーボールで宵の中はエンピツ七本を削ったら一時か二時に起き勉強）、話されていた事を思い出します。（この父が亡くなった二、三年は青い空を見上げるとキリストさまのような顔が現れたものです。今でもよく青空の中に同じ温顔が浮かびます。）」という一

文がありました。（この話はとても印象的でしたので文献③にも載せました）

⑤ 小野貞一様（二女順子様の夫）の覚え書き『二人三脚の記』より：

「父秋山卓爾は奈良郡山の出身で郡山藩士の後裔で若くして薬剤師となり、後の女子薬学専門学校（現大阪薬科大学）の基礎となった薬学校を創設するのに大変苦勞をしたと聞かされたものである。兵庫県出身の母エツもよく父を助けて学校発展に内助の功を發揮し、秋山家は母の一声で総てが決定する風も一時あった様である。両親は以上の様に学校事業に力をつくす一方で、家では後に壺屋町^{*}で薬局を開業しており、娘達は幼少の時からお互いに家事を手伝わされて成長した様である。」(中略)「昭和八年秋、当時の大阪市南方小学校校長をしておられた正井米三郎先生のお世話で、貞一、順子の二人は高島屋で見合いをする事になり、両家の両親、本人達は正井先生の紹介で食堂に席を設けて見合いをしたのである。結納の時の秋山家の希望で挙式は三年程先に延期してほしいとの事であった。当時の秋山の父は大阪女子薬専の基礎固めの為に東奔西走、多忙を極めており、全国の卒業生を訪問しては寄附集め等に努めていた様子である。自分は大阪女子薬専の主任教授として多数の娘さんをあずかっているのに、自分の娘が同じ学校に勤務している男と結婚するということに、世間の風評を気にしての事であった。」

(※: 壺屋町は、昭和53年の住所表示実施により現在の天満付近にあたるようです)

⑥ 秋山寿一様（長男融様の長子）のメールより：秋山家の系譜

秋山家は柳沢吉保^{*}の国替えに従って甲府から郡山へ移住したと、以前から聞いておりました。山梨県南都留郡に、秋山村というところ（隣町の上野原町との合併により上野原市になりそうで残念です）があり、そこがルーツであるということのようです。もともとは武田信玄に仕えていた郷士であったのでしょう。余談ですが、池波正太郎の小説「剣客商売」の主人公、無外流の剣豪・秋

山小兵衛（テレビでは、藤田まことが扮している）の出身地は、この秋山村であると池波さんは本に書いています。関東には、他に長野県の北東端にあって、新潟県南魚沼郡に接している秋山郷という秘境がありますが、ここも秋山のルーツに関係があると云われています。それにしましても、この大学が大和郡山と深い関係にあることについては何か因縁めいたものを感じます。（H17/8/31）

（*：柳沢吉保となっていますが、正しくは吉保の長男である柳沢吉里が江戸中期の享保9年（1724）に甲斐国甲府藩から郡山藩に15万1000石で入譜し、以後明治維新まで柳沢家が藩主となります。）

⑦ 今回調査で、石田恵子様と藤田比佐子様（御姉妹）から頂いた手紙より

本稿の執筆に関して、私は最近ご家族様と連絡を取りました。その内、恵子様と比佐子様連名の返書の中に、次の貴重な奥様エツ様のお話がありました。

「昭和一四年二月の卓爾に続き、七月に博*が亡くなったことは、母英子からいろいろ聞いたこともありました。他の男兄弟では、早くに秋山家を出た長男融以外には会ったこともありません。祖母エツとはけんかしながら仲よく暮らして私が10才まで過ごしました。父幸次郎、母英子も二人が亡くなるまで生活しましたが、父は寡黙でほとんどしゃべることなく静かな人で、母は生活を楽しんで先生のような生き方をしました。大阪では、造幣局近くに住んでいたらしく「通り抜け」（桜の）時期は掃除するのがイヤだとか、空襲で二回焼け出され「私もおなかの中で北海道日高に疎開（当時融一家が住んでいたらしい）」し、戦後京都に落ちついたり。もう二十年お話しが早ければみんなの記憶も鮮明であったかと今では悔やまれます。期せずして、本日は秋山エツの祥月命日です。

令和二年十月一九日、石田恵子、藤田比佐子（*：博様は、秋山先生の四男）

8. 「帝國女子藥學專門學校一覽 昭和五年」より

本稿執筆中に楠瀬健昭教授（100年史編纂委員）が旧校歌を調査された際、東京都港区芝公園の旧大橋図書館（現在の三康文化研究所附属図書館）に「帝國女子藥學專門學校一覽」の昭和五年と昭和八年の全文と昭和十年と十六年の入学案内が所蔵されていることを見つけられていることが判明しました。「帝國女子藥學專門學校一覽」は詳細な学生便覧にあたるもので、当時の学校の様子がよくわかります。その内、昭和五年のものは「帝國女子藥學專門學校々舎全景」（守口校舎）と講堂の写真（写真⑧）から始まり、校歌、寮歌、學年歴（現在の行事予定）、目次と続きます。目次には、沿革略、指令、（各種の）規程（1～33頁）、設立者、商議員（現在の評議員）、職員、舊（旧）職員、卒業者、生徒統計表、敷地及建物、さらに附録があり、全部で83頁に及ぶものです。秋山先生の名は、理事、商議員、教授の項で見つけることが出来ます。

とりわけ目を引くのは「生徒統計」の生徒の内訳で、総計644名、全国から集まり、北は樺太（1名）、北海道廳（庁）（3名）、南は鹿児島（8名）、台湾（1名）。さらに出身學校別では、樺太廳立豊原高等女学校、臺北洲第三高等女学校、他朝鮮、關東洲、滿洲、支那の各高等女學校名が見られ、当時の国勢の及ぶ地域の津々浦々まで本学の名は知れ渡っていた事がわかります。

一方、六項目からなる「生徒心得」の第一項は、「本校生徒ハ教育勅語ノ御趣旨ヲ奉戴シ常に左ノ綱目ヲ格守スベシ。一、婦徳ヲ涵養シ、知識ヲ磨キ身體ヲ強健ニ保チ立身報國ノ精神ヲ養フベキコト。」で始まり、第六項目まで規定されています。また、「通學」の所のいくつかには「一、登校又ハ下校ノ途中ニ於テ食堂、カフェー其他飲食店ニ立寄り飲食スル事ヲ禁ズ」とあり、日常の振る舞いまでが細かく指示されています。

規程の第七章「學費」では、入學料五圓で、第一學年は、前學期金五拾圓、後學期金五拾圓、第二學年～第四學年は、前學期金六拾五圓、後學期



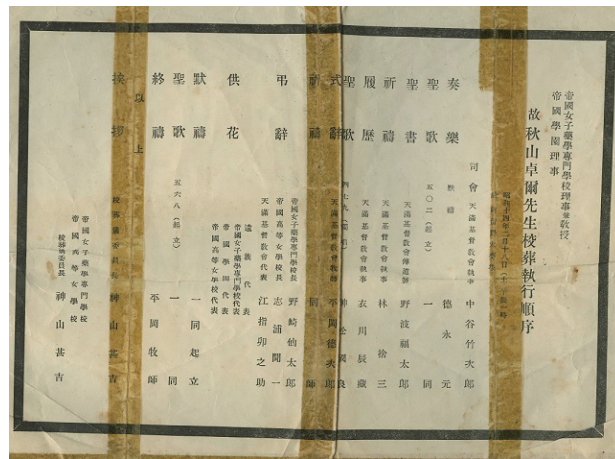
写真⑧：帝國女子藥學專門學校々舎全景（上）と講堂（下）の写真

金六拾五圓となっています。現在の貨幣価値と直接比較は難しいのですが、昭和5年から6年にかけては世界恐慌のため、戦前の日本における最も深刻な経済危機に陥った昭和恐慌と呼ばれる時代であり、昭和初期の東北の農家の酷い惨状は今もよく語られています。それゆえ、本学生徒の実家は当時としては相当の資産を有していたと思われます。一方、秋山先生他の理事の方々は、昭和七年の松原新学舎建設のために資金繰り等で多忙を極められたに違いありません。しかし、大正後期から昭和初期のこの時代こそ本学の歴史上最も高揚し、華やかに光彩を放った時期であったのです。

9. 森下利明先生のご講演録より

私は、秋山先生が卒業された郡山尋常中学校

(明治25年卒)、現在の奈良県立郡山高校の卒業生です。また、「八十年史」をまとめられた森下先生は大学卒業後の最初の赴任地が郡山高校という不思議な縁がありました。私が「秋山先生の顕彰になぜこれほどまでに熱心なのか」と考えると、それは先生の生き方と誠実なお人柄に強く引きつけられるために違いありません。先生と奥様が心血を注がれた日本初の女子薬学専門学校設立という前人未踏の業績は、森下先生が明らかにされました。しかし、秋山先生自身はその功績を後世に何も残そうとはされませんでした。「何故この様な崇高な人格が存在し得たのか?」。明治生まれの武人の家柄の矜持だけでなく、森下先生がご講演で述べられた一節にその核心があると思います(文献②)。すなわち、「先生が熱心なキリスト教信者であったということであります。先生がお亡くなりになられた折りの訃報に「ご遺族ノ希望ニテ基督



資料③：昭和十四年二月十八日、大阪市阿倍野斎場での故秋山卓爾先生校葬執行順序。

教ニヨリ挙式可仕候」と追記されていることを（資料③）、決して見落としていたわけではありません、が、先生ご夫妻の心の中で、信仰と人格がしっかりと深く結びついていたことまで、十分思いが及びませんでした。先生ご夫妻の堅い信仰に裏打ちされた献身のご努力に、今改めて深い感動を覚える次第です。学校のため生徒のため、ひいては人のため世の中のためにと「私」を犠牲にして少しも顧みなかったお人柄が、これで漸く解けてきたような気が致します。」

10. 終わりに

昭和14年2月10日に秋山先生が永眠されてから81年が過ぎました。今回、私の手元に15年間保管していた秋山先生に関する資料とご家族様からの手紙などをたよりに不安な気持ちで本稿を書き始めました。幸い、ご家族様の御協力や今回の調査中に、「帝國女子薬學専門學校一覽」などの新資料のいくつかも発見しました。保管していた資料を詳細に見ると生き生きとした当時の先生ご夫妻とお子様達のご様子が蘇ります。「八十年史」では知ることの出来ない本当の姿は、一枚の写真と一枚の便箋にこそありました。それらにより、先生ご夫妻のお人柄とご家族様の本学設立のための絶大なご尽力を明らかにする事が出来たと思います。ここに、現代人が忘れていた過去の日本人の自己犠牲も顧みない尊い生き方が明確に示されていま

す。また、今まであまり着目してこなかった道修薬学校時代の大川氏、八馬氏、樽谷氏からの貴重な証言なども見つかりました。私は出来るだけ正確を期するために、お孫様4人に私の原稿を読んで頂き、不安な箇所を正していただきました。お孫様達から自分たちの親が戦後の混乱期に辛酸を嘗めた事を聞いていました。しかし、ご家族は誰も声を上げることもなく本学を静かに見守られてきました。しかるに、大学側はご家族に何らの援助の手を差し伸べることもなく、あまつさえ消息を知る事さえ怠っていたのです。

秋山先生は、働き盛りの35年間で本学設立のために尽くされ、66才でお亡くなりになりました。私もまた35年間本学に奉職し、今年66才になりました。この間、大学では終始自身の研究に励み、家庭では二人の娘が育ちました。まさに、先生ご夫妻の遺徳を受けた一人であるわけです。残念な事に、令和3年（2021）3月末に本学は大阪医科大学との大学統合で117年の歴史を終え大阪医科薬科大学薬学部となります。恐らく、そこは真新しくニュートラルな薬学部となり、本学を育み発展させた最大の功績者である秋山先生の記憶もまた人々から薄れていくと思われます。秋山先生ご夫妻が篤く信仰を寄せられた神は何も語りません、ただいつの日か人をして語らしむと。

謝辞：

秋山先生のお孫様である石田恵子様、藤田比佐子様、池川正彦・擴子様ご夫妻、小野允久様には、写真と資料の掲載を許可していただくとともに私の不明な箇所も補っていただきました。ここに深く感謝申し上げます。また、資料提供と本稿執筆の相談相手になっていただいた楠瀬健昭教授にお礼申し上げます。また、本稿を丁寧に見ていただいた藤嶽美穂代講師に感謝いたします。さらに、快く調査協力をしていただいた同窓会室事務局の福井圭子様、高橋泰子様に深謝いたします。

秋山卓爾先生の文献

- ① 『大阪薬科大学八十年史』(1984)：森下利明先生らの八十年史編纂委員会編
- ② 『秋山卓爾先生の業績-本学草創期より薬専時代まで-』(2007)：大阪薬科大学紀要2007（創刊号）；森下利明
- ③ 『日本初の女子薬専設立者、秋山卓爾先生-ご家族と私の出会い』(2018)：大学時報、380号；春沢信哉
- ④ 『元校主、秋山卓爾先生のご親族様の本学ご訪問』(2006)：大阪薬科大学報52；春沢信哉